



Title	肉牛生産におけるブランド形成の過程と諸問題
Author(s)	柳, 京熙; 飯澤, 理一郎
Citation	北海道大学農経論叢, 55, 105-113
Issue Date	1999-03
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/11183
Type	bulletin (article)
File Information	55_p105-113.pdf



[Instructions for use](#)

肉牛生産におけるブランド形成の過程と諸問題

— 岩手県の胆江地区を対象に —

柳 京 熙・飯 澤 理一郎

The Process and Problems of Brand Forming in the Case of Beef Production

— The Case Analysis of the Tankou Area of IWATE Prefecture —

Gyunghee YOU · Riichiro IZAWA

Summary

The production of the Japanese Black cattle has changed, mainly since the liberalization of beef importing was implemented in 1991.

A result was the expansion of soaring calf prices and the Japanese Black cattle production that generally accompanies this phenomenon.

This beef is now in direct competition with imported beef, This was expected because the Japanese beef is predominant.

However recently, with the economy floundering, there has been a decline in demand for high quality beef and so it is obvious that calf price will decline as well.

This decline leads to the decrease of propagation farmhouses, which supply calves, and this is shown as a decline in Japanese Black cattle production.

The bottom of such a situation, the forming and maintenance of production centers become a big problem.

It places there in the beef production center forming and to do the becoming of the brand that was made the most effective means, too, is reaching a new aspect generally.

Therefore, of this paper considers about the trends and problems of beef production in the Tankou area of the Iwate Prefecture.

As a result, of this study the following has become clear.

The securing of a species bull becomes a big problem because when the species becomes strong the market corresponds accordingly.

Moreover, the opposition of interest in propagation production centers and beef production centers becomes serious. However, without the formation of propagation production centers, the development of beef production is also difficult.

1. はじめに

牛肉の輸入自由化が実施された1991年以降、和牛生産は大きく変化してきた。

まず指摘できるのは、和牛子牛の価格高騰、それに伴う和牛生産の拡大である。それは、輸入牛肉との競争力において和牛肉が優位であるという大きく期待されたためである。しかし、バブル経

済の崩壊後、高級和牛肉の需要減退及び子牛価格形成の低下が顕著である。このことは、素牛供給先である繁殖農家の減少につながり、和牛生産の減少として現れている。

今後、和牛生産の安定的な展開は非常に厳しい状況であり、このことに対応して、各和牛産地においても大きな変化がみられるようになってきている。このような状況の下、和牛生産における産地の形成及び維持は大きな問題になっている。そこでは、肉牛産地形成において、一般的に最も有効な手段とされてきたブランド化も新しい局面を迎えている。

そこで、本稿は、以上のような問題意識に基づき、いち早く素牛及び肥育牛のブランド化に成功し、肉牛の産地形成を行った岩手県の胆江地区を対象に、最近の肉牛生産をめぐる外部環境の変化とそれに伴う産地内部の新しい動向・問題を明らかにすることを目的とする。まず、胆江地区におけるブランド形成の過程を概観し、それに伴う和牛改良・種雄牛確保の現状について整理する。次に、ブランド化形成における繁殖・肥育産地の関連や問題を検討し、最後に今後の和牛産地の維持と展望について若干の考察を行いたい。

2. 岩手県胆江地区における和牛生産の特徴

岩手県の肉牛は黒毛和種より日本短角種の産地として知られてきた。実際、岩手県における肉牛生産の方針も1987年まで短角和種が主な対象とされていた。しかし、価格形成の面では黒毛和種の方が優れており、現在では一部の地域を除いて、そのほとんどが黒毛和種の生産に変わっている。

1995年度、岩手県における和牛の生産頭数をみると、黒毛和種が9万9千頭に対し短角種は1万1千頭になっている。これまでの飼養頭数の傾向をみると短角種は徐々に衰退していることがわかる。その中でも江刺市を中心とする胆江市場圏(胆江地区)は他産地よりいち早く和牛生産に取り組んだ結果、表1のように価格形成水準では全国の上位にランクされており、生産頭数においても他の上位市場に比べ多い出荷頭数となっている。

胆江地区における黒毛和種生産の特徴は、前述のとおり歴史的な経緯もあって、当初から単協を中心とした和牛の導入が行われ展開してきた。また現在もその傾向が強く残されており、江刺市に

表1 家畜市場の取引価格(1996年度)

単位：千円

順位	市場名	取引価格	取引頭数
1	兵庫湯村	532	1,557
2	岐阜高山	518	2,699
3	岐阜関	459	1,339
4	宮崎宮崎	445	3,551
5	大分玖珠	438	4,717
6	岩手県南の内胆江	431	14,570
7	宮崎東諸	422	2,474
8	兵庫淡路	421	8,785
9	宮崎児湯	415	8,603
10	宮崎南那珂	411	4,343
11	大分大分	410	2,194

資料：農畜産振興事業団「肉用牛取引情報」

註：岩手の場合、1997年から胆江と磐井市場が県南市場に統合されたが、ここでは取引成績を別々にまとめた。しかし取引頭数は両市場の合計である。

種雄牛の生産設備が設けられている。さらにここで種雄牛の助成・作出を行い、胆江地区全体に種雄牛の精液を供給している。そして、精液の販売から得る収益の一部は、以上の事業展開に利用される構造になっている。

他産地の和牛改良は、県を中心に展開されることに對して、胆江地区の和牛改良は単協を中心に展開されており、極めて狭い範囲での自己完結的改良を行っているといえるのである。

このような和牛生産の特徴から、胆江地区の子牛販売は陸中牛という統一した血統での出荷が可能となっている。さらに近年には、優秀な素牛生産を背景に肥育産地の形成もみられ、そこでは前沢牛というブランドが確立されている。

次は胆江地区を対象に、和牛生産の展開過程とそれに伴う肉牛のブランド化過程について概観したい。

3. 和牛子牛産地の形成過程

1) 種雄牛の導入と和牛改良

江刺に和牛が導入され本格的な発展を遂げたのは1950年代末からである。以前は馬産地で有名であったことから、農家の所得源としての和牛導入は比較的容易であった。

1958年に市制が施行された江刺市が、事業の展開を行う土台を整えたのであるが、そこでは和牛

生産の振興について本格的な施策が求められていた。しかし地元での和牛生産は限界があったことから、1961年に肉質の改善をはかるため、玉里農協（現江刺市農協）が兵庫県美方郡から長福号という種雄牛を導入したのがその出発点である。その背景には、まず当時、子牛の価格形成は家畜商との庭先取引が主流で、和牛の交配も自然交配がほとんどであった。したがって子牛の資質・能力など濟一性が乏しく、子牛販売は所得補填という当初の目的は達成されなかった。この打開のため、開始されたのが先進産地からの種雄牛の導入であった。当時の和牛改良はとくに肉質の改良においては、雄牛側からの改良が目された時期である。したがって脂肪交雑を中心とした肉質の優れた雄牛を指定交配種雄牛にすることによって、雌牛群の改良を一層進める集団的育種改良が導入されたのである。まず導入基準は肉質的に優れた但馬牛に決定された。さらに、その後の市場対応と農家経営の確立をめざし、江刺和牛生産改良協会がこの年に発足し、本格的な和牛生産に取り組むようになった。また翌年には、経済連開設の家畜市場が年4回開設されることになり、市場面でも基盤整備が進展した。陸中牛という名称もこの時期から使われるようになったのである。しかし当初は、種雄牛を但馬牛に限定した程度で、陸中牛の改良方向については決めていなかった。

そこで、効率的な改良を進めるため、1962年に江刺市家畜人工授精所を開設し、1963年から液状による精液の供給を開始した。この方法は以前行った自然交配に比べ画期的改善が可能になった。すなわち同じ血統の牛を同時に作る事が可能になったことにより、改良速度を早めることができたのである。これは但馬牛である和人号の導入をきっかけとして、一層促進された。和人号は1964年には登録協会の高登録検査にも合格し、種雄牛としての資質は高く評価されることとなった。このことによって、和人号の精液は県外への販売も可能になるという大きな成果を得ることができた。さらに、和人号の資質を確固たるものとして位置付けたのは、1970年に京都大学で行われた産子6頭の産肉検定であった。この結果、産子6頭の全頭が当時、格付制度の最高ランクとなる極上の判定を受けたのである（註1）。

この時期から和人号が陸中牛の改良の基本となり、それ以降の陸中牛の改良方向がほぼ決定された。

1970年代は、経済発展などの社会的変化の中、和牛生産の流れも体積・体型血統から肉質重視の時代に入り、肉質が優れた兵庫血統の但馬牛が大きな脚光を浴びる時期であった（註2）。このような時代背景もあって、1974年から繁殖基盤の拡大のため岡山・鳥取から導入していた繁殖雌牛の導入を停止し、繁殖雌牛の導入先は兵庫県美方郡のみに切り替えられた。このことは子牛生産の目標を但馬牛と決定したことを意味する。導入先においても兵庫県美方郡に絞られた。このような背景には、「飽食化」が叫ばれ始めた1970年代中葉以降、和牛生産の方向が次第に肉質重視に転換され、和牛改良の方向も「体積」重視から「肉質」重視へ大きく方向転換したことが指摘できる。そして、ここで浮上してきたのが種雄牛の血統問題であり、肉質の優れた「兵庫系統」が一躍脚光を浴び、子牛価格はますます但馬牛の血統を第一の基準として形成されるようになってくるのである。さらにこの時期から牛肉輸入自由化が予想されるとともに、農産物の全体な価格下落が進展し、各産地の品質差別化が意識的に強調されることとなり、血統による子牛差別化が強く推進された。これは結局、純但馬牛生産を実現することで市場対応を図ることとなったのである。したがってこの時期から同一種雄牛の交配を積極的に推進し、繁殖雌牛の濟一性に努める一方で、陸中牛の資質は徐々に確立していた。

2) 広域産地への拡大

江刺市は和人号の導入と繁殖雌牛の導入の絞り込みにより、血統の統一化を伴う和牛改良を積極的に進めてきた。このことが実を結び、1973年に江刺市和牛生産改良組合は岩手県内での認定組合第1号となった。引き続き、1974年には原種牛規定が実施されることになった。原種牛とは、特色のある陸中牛の濟一化と主産地化をはかるために、原種牛委員会が認定した中核的繁殖用種牛を指し、この原種牛規定とは効率的な交配を通して和牛改良を進める制度である。この規定により本源登録が開始され、陸中牛の体系的生産を可能とする繁

殖雌牛の再生産構造も確立されたのである。すなわち、このことは原種牛制度に基づき、資質が優れた繁殖雌牛は管内で保有できるシステムが構築された。

その後も種雄牛の導入は次々と兵庫県美方郡から行われた。このような組織的な和牛振興により、素牛生産を中心とする和牛生産は拡大され、次いで既存の家畜市場の整備が求められた。そこで、1978年には既存の家畜市場が広域市場統合により胆江市場に合併されることとなった。胆江市場は毎月開催となり、市場範囲は胆江地区の全域に拡げることができた。これが、生産範囲を一層拡大させ、既存の江刺市を中心とした和牛生産は1979年から胆江地区の2市3町1村で広域子牛産地をめざし、胆江和牛改良協会が結成された。

胆江和牛改良協会は従来の和牛改良組織を横断的に統合する形式を取り、産地間の協調体制を強化し市場対応を行う役割で組織された。広域産地の形成を可能にした背景として、まず江刺市のみでは、和牛改良に必要な費用を賄うのが限界であったことが指摘できる。さらに、江刺市としては産地拡大を通して、ロットを確保する必要性が生じてきたのである。したがって、この時から胆江地区の種雄牛の選定・助成については、胆江和牛改良協会がその主体となった。

胆江和牛改良協会の目的は和牛の生産改良、増殖及び流通の合理化を図り、併せて和牛の広域的産地形成を目指すことに決定した。その促進のため、和人号は胆江全域の指定種雄牛に選定され、1981年から和人の凍結精液を今後10か年間は限定交配とすることを決定し、胆江地区の資質改善に積極的に取り組むと同時に、胆江地区を対象とする閉鎖的育種が本格的に取り入れることになった。この結果、子牛生産も拡大し、図1に示されているように、1980年代前半には子牛生産が年間1万頭まで達した。しかし、当時は全体的に子牛価格の低落傾向が強く、胆江地区の子牛価格もその影響を受け、子牛価格は全国平均と急速に接近していた。しかし、1980年代半ばから、牛肉輸入自由化という危機意識から子牛購買において資質重視の傾向が強くなったことから、牛肉自由化を境に価格の上昇が実現され、全国平均価格との差も10万円以上に広がった。

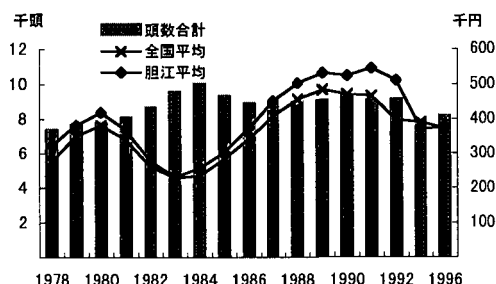


図1 胆江地区における子牛生産頭数及び価格の推移
資料：畜産の研究第48巻第1号（1994年）p.184から参照した。

さて表2は県外の移出先を示しているが、出荷頭数のうちおよそ60%が県外への移出になっている。移出先は山形県を初め、三重県、岐阜県などとなっており、優秀なブランド牛肉の素牛として利用されていることが容易に予想される。

3) 肉牛ブランドの確立

陸中牛の改良方針は、まず種牛を但馬に限定し、但馬の血統を3～4代交配することで資質の統一化をはかる。ここで血統的に整備された繁殖雌牛に但馬系の種雄牛を交配し、さらに、産地は原種牛制度に基づき、優れた繁殖雌牛を管内に保有するシステムを完成した。この過程の中で種雄牛の導入先は兵庫に限定され、次々と導入が行われてきた。とくにそのうち、恒徳・菊谷の種雄牛の資質は優れており、1982年の菊谷の導入からは他産地との格差が顕著にみられるようになった。さら

表2 主要県外出荷状況
(1995年度)

出荷県	頭数	割合
栃木	2,604	11.56
山形	2,474	11.96
岐阜	2,350	11.36
福島	2,131	10.30
宮城	1,977	9.56
群馬	1,806	8.73
長野	1,768	8.55
茨城	1,613	7.80
小計	9,295	44.94
県外出荷	20,690	100

資料：岩手県経済連「和牛子牛市場取引成績書」から作成した。

に1986年から、江刺・胆沢・金ヶ崎が参加する広域育種組合が認定された(註3)。この結果、和牛改良の体制も一層促進され、1988年から胆江地区に恒徳・菊谷の指定交配が実施され、この二つの種雄牛を主体とする計画的な交配が開始された。これは閉鎖的な育種方法を一層強化することとなった。表3は江刺市における繁殖雌牛の血統を示しているが、繁殖雌牛が如何にこの二つの血統に集中しているかがわかる。つまり、胆江地区の特徴ある血統を創設することができたのであり、これは一方で和牛産地確立の大きな要因となったのである。

以上のような優秀な資質をもつ胆江地区には、肥育産地として成長する要因もまた内在していた。そのなかでも、表4のとおり前沢町はその中心的な産地として確立している。

前沢町が肥育牛を本格的に出荷し始めたのは1969年である。その当時は、農協を主体として東京食肉市場に100頭～200頭台を出荷する程度にすぎず、繁殖雌牛を島根などの先進産地から導入し、

主に素牛生産を行っていた。

このように素牛生産から肥育生産への転換を考えたのは、江刺市が導入した種雄牛の和人号の肥育成績が知られるようになったからである。和人号の導入により産地家畜市場の子牛価格は徐々に高くなり、肥育農家や家畜商人からの評価も上昇した。そこから、前沢町では繁殖生産から肥育生産への転換が本格的に行われるようになり、1970年代半ばから地域内の一貫生産及び肥育農家の出現が見られるようになった。

その以降は1979年に、胆江和牛改良協会が結成されたことが大きな意味をもつ。これは陸中牛の特長をもつ子牛生産が広域に可能になり、一貫性をもつ前沢牛の生産基盤が構築されたことを意味する。この結果の背景には、恒徳号や菊谷号という優秀な種雄牛の存在があったことはいまでもない。また前沢牛の確立によって、その素牛である陸中牛の知名度が高まり、価格形成に大きな貢献をしたことまずあげられる。さらに1980年代から農産物の全般的な価格低落や農産物輸入などの外部経済の変化から製品差別化が強く求められた背景も指摘できる。その意味から前沢牛は品質・ロット的にも揃っており、価格的にも既存のブランド牛肉より安かったことがことで、市場対応がうまく軌道に乗ったのである。この結果、表5のとおり数々の賞を受賞し、肉牛業界はもちろん新聞・テレビなどのマスコミで全国的に紹介されるようになった。

以上のことから、図2に示されているように、前沢町における肥育牛の価格推移は、1985年を境に肥育牛の平均価格は80万円台から100万円台まで上昇した。さらに販売頭数も1983年に1,000頭台を突破し、その以降も着実に頭数を増加し、量・質

表3 江刺管内種雄牛別頭数
(1995年1月1日現在)

種雄牛別	頭数	割合
菊谷	1,446	23.9
恒徳	1,702	28.1
和人	654	10.8
他胆江計	495	8.2
県産系計	755	12.5
兵庫系計	324	5.4
島根系計	566	9.4
岡山系計	5	0.1
その他	104	1.7
合計	6,051	100

資料：江刺農協の総会資料から作成した。

表4 胆江管内の和牛飼養頭数

単位：頭

市町村	繁殖雌牛				肥育牛			
	飼養戸数	飼養頭数(計)	2歳以上	2歳未満	飼養戸数	飼養頭数(計)	雌	去勢
水沢市	198	570	520	50	96	1,426	632	794
江刺市	1,669	5,605	5,063	542	16	806	430	376
金ヶ崎町	326	1,021	885	136	25	503	327	176
前沢町	439	1,373	1,162	211	146	2,600	988	1,612
胆沢町	695	2,795	2,556	239	65	1,950	850	1,100
衣川村	214	660	620	40	22	580	120	460
計	3,541	12,024	10,806	1,218	370	7,865	3,347	4,518

資料：「市町村別家畜改良関係頭羽数調査」から作成した。

表5 全国肉牛枝肉共励会の受賞実績 単位：円/kg

年度	部門	賞名	枝肉単価	父牛	母の父
1983	雌牛の部	最優秀賞	5,010	和人	勝
1986	去勢の部	名誉賞	4,823	恒徳	和人
	去勢の部	最優秀賞	5,099	福昌	和人
1987	去勢の部	名誉賞	5,105	恒徳	和人
	去勢の部	最優秀賞	5,001	安美金	晴美
1988	雌牛の部	最優秀賞	7,597	安波	静福
1986	去勢の部	名誉賞	11,115	菊谷	茂美
	雌牛の部	最優秀賞	4,474	菊谷	恒徳
1991	去勢の部	名誉賞	17,006	恒徳	賢晴
1992	去勢の部	名誉賞	12,108	福昌	茂重波
1993	去勢の部	名誉賞	10,062	菊谷	糸晴波
	雌牛の部	最優秀賞	9,167	菊谷	福昌

資料：前沢町畜産資料から作成した。

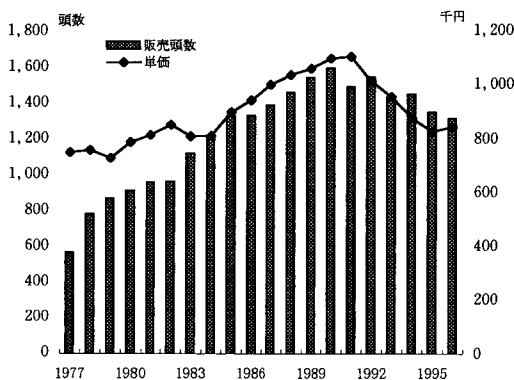


図2 前沢町における肥育牛の出荷及び価格の推移
資料：前沢町の家畜資料から作成した。

ともに安定的な生産体制が確立した。そこで、1987年に前沢牛銘柄商標登録出願を行い、1990年度に商標登録され、東京の食肉卸売市場に前沢牛として、本格的に出荷することとなった。

その実勢をみると、1994年には1,373頭が出荷され、前沢牛（格付4以上）として認定されているのは、全頭数の80%以上に達している。同期間の全国平均は49%すぎなかったことは好対照である。また同期間の枝肉の価格形成水準をみると雌・去勢の両方も東京の食肉卸売市場のA5の平均価格を、kg当たり200円程上回っている。

4. ブランド形成における現状と諸問題

1) 市場価格の変化

最近、和牛をめぐる環境は大きく変化している。牛肉自由化を境に起きた子牛価格の暴騰や和牛生

産の増加は、今度は子牛価格の低迷に一転した。また、バブル経済崩壊後の高級和牛肉への消費減退は産地に大きな影響を与えている。

図3は和牛枝肉の価格変動を示したものである。高級和牛肉の消費減退により格付け4以上の価格は低下しておりA5以上の格付け率も1991の29.7%から1997年時点で17.4%まで減少している。この結果、既存の資質優先の子牛購買に変化がみられるようになっている。

胆江地区の子牛改良の方向は、前述にも若干触れているが、家畜市場に上場される子牛の血統をみるとさらに明確にわかる。まずこの地域から生産される子牛の母方は兵庫系が85%、島根系が10%、その他が5%になっている。さらに繁殖雌牛に兵庫系の種を100%交配する仕組みとなっており、なお導入された20頭あまりの種雌牛は全頭兵庫に集中している。このような改良方向は、高級肉生産をその背景とし、一部の肥育農家や家畜商人の需要に応えたという歴史的な経緯がある。また、今まではこのような市場対応は大きな成果を得たのも事実である。しかし表6でわかるように、去勢肥育牛の枝肉量の場合、1995年の全国平均の428kgを大きく下回っている。枝肉量はあまり期待できなくなっている。現在、枝肉価格の状況や素牛購買者の立場からみると、このような血統の子牛はリスクが大きくなっているのである。さらに、前掲の表6のように、胆江地区における主要種雄牛別肥育牛の価格形成には大きな特徴がみられる。まず注目したいのは菊谷号と恒徳号は、

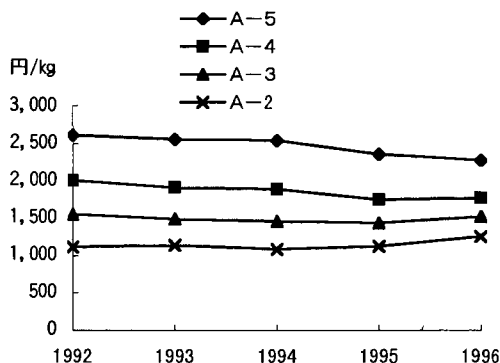


図3 牛肉卸売価格の推移

資料：農林水産省「流通統計」から作成した。
註：東京の卸売市場である。

表6 岩手県における主要種雄別出荷成績

頭・kg・円

	雌				去勢			
	種雄牛	出荷頭数	枝肉重量	枝肉単価	種雄牛	出荷頭数	枝肉重量	枝肉単価
1995年	菊谷	175	330	2,365	菊谷	380	393	2,184
	恒徳	89	336	2,301	恒徳	147	399	1,971
	照本	177	338	1,801	照本	184	403	1,726
	福神	284	330	1,996	福神	336	387	1,776
	種雄牛	出荷頭数	枝肉重量	枝肉単価	種雄牛	出荷頭数	枝肉重量	枝肉単価
1996年	菊谷	183	331	2,468	菊谷	337	398	2,285
	恒徳	98	339	2,113	恒徳	208	396	1,991
	照本	339	343	1,909	照本	326	399	1,853
	福神	139	335	2,045	福神	206	386	1,859

資料：岩手県の畜産資料より作成した。

他の種雄牛との価格差である。その価格差は大きいことがわかる。肥育牛の成績が直接子牛購買に影響を与えていることを考慮すれば、その現状は深刻な状況である。さらに追い打ちをかけるように、菊谷号、恒徳号の精液の在庫はほとんどなくなっており、次の優良な種雄牛が確保されていない現在では、今後の市場対応の見通しは困難である。

以上の状況から、表7のように胆江地区の子牛価格は、周辺産地との価格差が大幅に縮小されている。結局、胆江地区の種雄牛生産は、地域の自己完結の側面が大きく、また和牛改良も当初から外部に依存する体制であったことから、種雄牛の作出には大きな困難が残されているといえる。同時に前沢町の肥育生産にも大きな影響を与えかねない状況になっている（註4）。

以上のような和牛生産をめぐる環境変化は産地には大きな戸惑いを与えている。とくに市場対応

の有効な手段であると思われた血統整備は、変化する市場状況に対し、即時に対応できない状況である。現在までは肉質で勝負し、高い子牛価格を維持してきた胆江地区にとって、和牛生産は厳しい状況なのである。

2) 市場対応の地域間問題

このような状況を重くみた胆江地区では、江刺市が1991年から和牛交配研究会を設置し、1991年鹿兒島から初任牛20頭、1992年にも子牛25頭を導入している。1996年12月現在、89頭が導入され改良を重ねている。このような事業により、繁殖雌牛は50頭近く管内に保留され、基礎繁殖雌牛として使われている。

今後は胆江和牛改良協会を中心として陸中牛造成事業に編制され、事業を行うことになった。しかし改良にはまだ時間が必要であるし、江刺市を中心とする和牛改良の方向は以前と変わっていない

表7 岩手県における家畜市場別取引成績

単位：円

	1995		1996		1997. 3. 31	
	平均価格		平均価格		平均価格	
	雌	去勢	雌	去勢	雌	去勢
中央	312,701	397,428	327,931	404,967	364,461	428,005
花北	298,092	394,653	319,915	396,149	—	—
遠野	306,555	389,253	322,622	387,534	—	—
胆江	400,407	436,211	393,460	412,084	377,600	424,148
磐井	316,408	400,451	327,713	402,281	368,958	465,018
平均	333,839	405,972	344,941	403,864	370,340	439,080

資料：岩手経済連「和牛子牛市場取引成績書」から作成した。

註：胆江市と磐井市場は1996年10月から統合されたが、ここでは比較を容易にするため、別々にまとめた。

いため、今後の対応を注目する必要がある。これに対し、前沢町では江刺市から導入された繁殖素牛は、繁殖生産を3代までに制限している。さらに以前から島根牛及び九州から年間20～30頭の繁殖雌牛を導入して、肥育素牛の体積を維持してきた。

このような背景には、まず前沢町は他産地より豊富な肥育成績のデータを保有しており、牛肉需要をめぐる変化に迅速に対応できる環境を構築していることが指摘できる。さらにもう一つは、胆江地区による和牛改良組織の編成問題である。前述にも言及したとおり、胆江地区の和牛改良は胆江和牛改良協会を中心に各産地の和牛改良組合を包括した体制で開始された。しかし、1996年から胆江育種組合が認定され、これらの組織は育種組合が改良目標を決定し、胆江和牛改良協会がこれに従い、和牛改良を実施するシステムになっている。しかし胆江育種組合は胆江地区の6農協のうち3農協のみが参加している。これは胆江地区のすべての農協が参加している胆江和牛改良協会と比べ、その範囲は狭くなっている。したがって、実質的に地区全体の統一的な和牛改良は困難になったのである。実際、前沢町は前沢町原種牛制度を設け、胆江和牛改良協会に指定されている種雄牛を利用するものの、陸中牛としての前沢牛の特質を規定するとともに、違う改良方法を採用している。これは繁殖生産とは違う立場に立つ、実質的には独自の改良である。前沢町は肥育産地で産肉性（血統）に関する情報をもつという有利性から、体型・体積に富んでいる島根系統を重視し、その繁殖雌牛の交配データを集積した記録を分析し、独占的な情報を利用し市場に対応してきた。この結果、図4のとおり胆江地区のうち、前沢町の子牛は高価格を維持している。このような肥育産地に対して、繁殖産地においては菊谷号と恒徳号を引き継ぐ後継種雄牛が確定されないことから大きな不安が生じている。さらに和牛改良の有効な手段である育種価判明率も19%に止まっている（註5）。これは最大の肥育産地である前沢町からの情報還元が遅れているためである。肥育産地による枝肉成績情報の独占の状況下では、和牛改良が効率的に行われない。とくに、さらに肥育生産においても、上物の格付け率が激減しており、

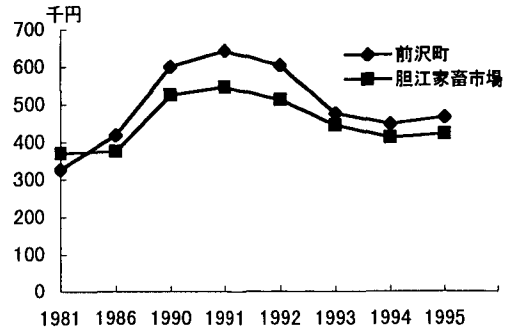


図4 前沢町の子牛価格形成の推移

資料：畜産の研究第48巻第1号（1994年）p.184から参照した。

素牛の資質管理は大きな課題となっている。このような危機意識から、前沢町を含む広域育種組合の拡大と1996年から両組織の単一化などの地域合意がなされた。しかし、果たして前沢町が共同の育種目標にとともに取り組むか、また情報還元が行われるか、などまだ未知数な部分が多く残っている。

5. まとめ

以上のように、和牛産地をめぐる状況は非常に厳しい。肉質の高級化は自由化に対し一定の競争力をもつと判断され、各産地でもこのような改良に力を尽くしてきた。しかしバブル経済の崩壊と自由化の進展の結果、これは説得力を失いつつある。高級和牛肉への需要減少や価格の低下は産地に大きな転換をせまらばかりである。本稿で対象とした岩手県のと牛産地は、その導入が比較的遅い産地でありながら、全国的にも優秀な産地作りに成功している。しかし、以上で指摘したように大きな転換期を迎えている。江刺市の事例に代表されるとおり、子牛はその価格の低落が大きく、価格低迷による生産の減少もみられている。これに対し、肥育産地の前沢町は様々な産肉情報を通じて利潤確保には一定の成果を得ている。しかし現在の状況から、胆江地域からの安定的な素牛導入は困難な状況となりつつある。これは繁殖地域と肥育地域との分離により、問題を深刻化させているといえる。また胆江地区の和牛改良はすでに限界に達しており、今後、如何に和牛生産を維持するかは、繁殖産地及び肥育産地の両方の連携に

大きく関わっている。

註

- 註1) 産肉能力検定には、直接検定と間接検定がある。直接検定は種雄牛候補牛に対する第一関門であり、一定の資格条件を備えて離乳後の雌子牛が選ばれて検定される。数頭の種子牛が同一な牛権下で一定期間肥育飼養し、その機関内の増体面及び飼料要求率など数項目と体型質質、発育を加味して優れたものを選抜する方法である。間接検定とは、直接検定によって選抜された種雄牛の子牛を検定するもの。その子牛の中から6頭～8頭を所定の検定場に集め、一定の飼養管理下で若令肥育する。増体速度や飼料要求率を調べる同時に、と畜して肉量や肉質の判定を行うが、子供(去勢牛)の産肉能力がよければ、父(種雄牛候補牛)もよいであろうと推定する方法で、京大で行ったのは間接検定である。これは和人数が持つ種雄牛の能力を示す一つの指標として理解できると思われる。
- 註2) 宮田 [1] P.11を引用すると、「1973年当時の兵庫と鳥取の雌子牛価格は14%の開差であったが、1976年には56.4%に開いた。」と指摘している。詳しいことはPP.10～11を参照すること。
- 註3) 1972年には、牛肉自由化の圧力が高まる中、和牛肉の高級化を目指し、全国的規模の集団的改良を発展・強化する必要性が高まってきた。そこで、既存の和牛改良が育種組合を中心とする特定地域に限定されていることから、既存登録協会の制度を一部改正して登録事業を細分化し、育種組合の下部組織として本原登録と認定和牛改良組合を設けた。現行の登録制度では、和牛登録の区分は、段階的に並べると基本登録、本原登録、高等登録及び育種登録の4段階になっており、和牛の改良程度により基本登録から最終的には育種登録へと昇格していく仕組みとなっている。和牛改良体系は和牛改良組合を基盤に展開し、そこから一定の基準を満たせば育種組合として認定できるシステムである。
- 註4) 和牛子牛をめぐる環境変化は肥育生産にも影響を及ぼしている。実際に、胆江地区から素牛を導入している前沢町の場合、上物率(各付け4以上)は1988年

の80%台から1996年には50%台まで減少している。

- 註5) 肉用牛体型を重視した審査基準に基づく改良と「血統」という一般的な購買基準には様々な矛盾と問題点があり、当時の登録規定では枝肉形質、中でも肉質を改良するための選抜基準の提示にはほど遠かった。したがって登録規程の各種登録区分の資格条件と現実との間に整合性が取れなくなったのである。このことから、牛肉自由化を迎えて肉質と肉量の改良速度を一層高めるためにも、必然的に登録規程の改正を迫られるようになった。そこで登場したのが、現場枝肉成績を用いたアニマルモデルによる育種価評価である。(全国和牛登録協会 [6])によると、育種価とは枝肉成績や血統情報からアニマルモデルという分析手法を使って、血縁関係にある種雄牛と繁殖雌牛の遺伝的能力そのものを推定するものである。現在和牛の場合、育種価が最も一般的で正確な選抜基準となっている。岩手の場合、全国の中でも非常に低い数値となっている。

謝辞

本稿をまとめるにあたり、「秋田県立農業短期大学」の佐藤了先生から多大な協力を得ました。記して謝意を表する。

引用・参考文献

- [1] 宮田育郎「但馬牛—日本における肉牛資源問題—」『日本の農業』135号, 1981年。
- [2] 新山陽子「肉用牛産地形成と組織化」『日本の農業』154号, 1985年。
- [3] 森島賢編著『現代牛肉経済の諸問題』明文書房, 1988年。
- [4] 柳京熙「北海道における和牛改良と精液供給」『農経論叢』第54集, 1998年3月。
- [5] 柳京熙・飯澤理一郎「和牛子牛の価格形成と血統問題」『北海道農業経済研究』第7巻第2号, 1998年。
- [6] 全国和牛登録協会「これからの和牛の育種と改良」, 1997年。